

安全



安心

JAL不当解雇撤回ニュース

No457号 2015.0820
発行: JAL 解雇撤回国民共闘事務局
連絡先: 航空労組連絡会事務局
〒144-0043 大田区羽田 5-11-4
フェニックスビル内
TEL: 03-3742-3251 FAX: 03-5737-7819
<http://www.jalkaikotekai.com>

8月10日 誰のための安全なのか。何のための解雇なのか。 シンポジウム「8.10 明日への誓い」

2015年8月10日、JAL 不当解雇撤回国民共闘会議は、シンポジウム「8.10 明日への誓い」を都内で開催しました。夏休み中にもかかわらず、600人の参加があり、会場は熱気に包まれました。今年、JAL123 便事故から30年を迎え、マスコミでもこの問題は取り上げられました。シンポジウムでは、123 便事故を契機に JAL 経営者が約束した「絶対安全」を実現する4つの誓いがどうなったのか、165人の整理解雇はなぜ行われたのかを議論し検証しました。



シンポジウムのコーディネーターとして、新聞労連中央執行委員長の新崎盛吾さん、パネリストとして、ジャーナリストの安田浩一さん、JR 職員の田中博文さん、客室乗務員の内田妙子さんそして機長の飯田祐三さんが出演しました。



新崎盛吾さん

第1部 映像「明日への誓い」

JAL は多くの連続事故を起こし 123 便事故後に絶対安全を誓ったが、その誓いを忘れ破綻し、罪のない労働者を解雇しました。これは国鉄民営化時の国家的不当労働行為に酷似していることを学びました。

そして JAL の誓いを履行させ、安全な運航と明るい職場を築くために、みんなで考えていかなければならないと提起されました。その後、パネリストの方から発言がありました。

ジャーナリストの安田さん



今朝、取材先の沖縄から東京に戻ってきた。飛行機が到着し出発するまでの時間が大変短くなっており、あわただしく働く人たちを見て驚いた。取材を通してコスト削減を優先し、業務の外注化で現場の力が衰えていくことを見てきた。

かつて JR では、スローガンとして安全より先に「カゼグ」であった。とにかく急げ、とにかく「カセグ」で安全を置き去りにし、日勤教育と称して労働者をいじめ、恐怖政治が行われた。公共交通機関の労働組合として何のために誰のために、運動するのかということを皆さんと考えてみたい。

JR 職員の田中さん

国鉄の再生と JAL の再建で、共通して経営が行ったのは組合つぶしである。JAL の放漫経営、行政の杜撰さなど映像で紹介された。



かつて国鉄分割民営化の時には、28兆円の負債があった。これには、新幹線開業資金の借り入れや我田引鉄と言われた地方交通線の建設での利益誘導などがあった。

利益なくして安全なしというのは間違っている。事故が起きると労働者に責任転嫁し、事情聴取や日勤教育が繰り返された。そこには安全への配慮はなかった。

客室乗務員の内田妙子さん

1975年から乗務。いくつかの事故を経験し同期も犠牲者となった。経験から事故は防げたと思っている。



事故の背景には必ず営利優先の施策があった。そして分裂労務政策で組合つぶしが行われていた。客室乗務員の仕事を続けていけばいくほど、命を失う仕事であることを知った。だからこそ、何をすべきかを考え、組合活動にも積極的に行ってきた。

保安要員の仕事には、会社の教育だけでは不足している。先輩や仲間から話を聞き、組合発行の事故追悼のニュースや冊子を読み、学習会に参加して勉強してきた。だから、30年以上もこの仕事に向き合えてくれた。

機長の飯田祐三さん

123 便事故で何が変わったのか。パイロットの仕事は安全を守りきることである。それには、労使の信頼関係が不可欠である。JAL の連続事故を見ると、経営者が営利に走り合理化を行なった時に発生している。123 便の時もそうであった。



事故後は、機長の組合活動も可能となった。これまで人身事故が起きていないことは、明るい職場と民主的な労働組合の存在が重要であることを示している。

一方で、稲盛氏の「御巣鷹事故は社員のトラウマ」という発言には、航空経営者としての安全運航への姿勢が問われるものである。

第2部、パネリストによるクロストーク

コーディネーターの新崎さんから、安全問題や労使問題を中心にテーマがだされ、それにパネリストたちが答えました。また会場からの質問にも答えながら進行していきました。

JAL の事故の歴史と労務の歴史をみると、国鉄の分割民営化で行われたことと同じであり、その後、日勤教育、福知山線事故などが起き、さらに JR 北海道での事故と続き安全は確立されていない。

また、JAL の破たんの原因については、リーマンショック後の経済状況に対応できなかった JAL 経営体質の甘さを指摘し、航空行政の責任にも触れました。

そして JAL が行っている、キャビンクルーユニオンを徹底的に排除しようとする労務姿勢では、JAL 全体の労働者の団結は破壊され、安全を守る労働者はいなくなってしまう。さらに、パイロットの流出問題を解決するには、一日も早く被解雇者を戻すことから始めなければならないし、ものを言う労働組合の存在と運動の重要性が改めて参加者の確信となりました。

最後に、「8.10 明日への誓い」声明文を採択して、シンポジウムは閉会しました。

集まったアンケートには、「JAL も JR もコスト削減を考えるのは、やむをえないが、安全はそれ以上に大切だ。乗客の一人として経営者に安全第一を考えもらいたい。」「JAL の問題ではなく、日本の労働組合のおかれている現状を考えさせてくれる集会でした。」などの声がたくさん寄せられました。